転機に立つ水俣市

水俣市はいま転機に立っている。チッソ水俣工場の合理化、水俣病の補償問題、繰り上げ次期市長選という三つの大きな問題が期せずして一緒になった。どれも市の将来を左右する。しかも三つとも密接に関連し、微妙に影響し合う性質のものだ。そこが、同市の特色でもあるが、これらの問題解決いかんが、今後の水俣を方向づけることになろう。ことしいっぱいがそのヤマ場とみられる。

（西村記者）

チッソの合理化

「石炭産業を見てごらんなさい。この十年で全くカゲをひそめてしまったでしょう。電気化学も石炭の運命と同じですよ。早く石油化学に乗り換えなければ、水俣工場がつぶれるのは目に見えていますがね」とチッソ幹部はきっぱり言う。初代社長野口遵が豊富な水力電気と石灰石の現地に目をつけて起こした電気化学工場としての水俣工場の歴史は終わろうとしている。これまで工場規模はふくらみこそすれ、原料は変わっていない。電気を原料にしてカーバイドをつくるアセチレン工業が主体で塩化ビニールと肥料の生産が二本の柱である。四十年の歴史をささえたのは自家発電による安価な電気であった。

しかし最近の技術革新は石油化学コンビナートを中心に効率の大きい化学工場集団を出現させつつある。他資本の工場といえども、お互いの原料は隣の工場からパイプ一本で引き込むことが出来る。輸送費ゼロ。この点水俣は不利。消費地も遠い。

水俣工場は体質改善が迫られている。塩化ビニールの原料をアセチレンから石油のエチレンに切り替えようとしているが、エチレンは石油化学コンビナートから船で運ぶ以外にない。同社技術陣が着目したのは肥料部門から出る塩化水素である。これがなかったらおそらく全面撤退しかなかった。

塩化ビニールを製造するさい、多量の塩化水素を必要とするが、同工場は肥料部門の塩化カリから硫酸カリを造る時、多量の塩化水素が発生する。わが国ではこの塩化水素は貴重なものとされている。

化水素は貴重なものとされているという。この塩化水素を生かせば輸送費をかけても石油化学コンビナートにも対抗出来ると踏んだ。これが今回の合理化の基礎となっている。もしこの塩化水素が生かされなかったら工場全体の浮沈にもかかわることだったといわれる。

石油化学への切り替えによって余る電力は、同じく余ったカーバイド炉と組み合わせ、シリコン製造に使う。肥料原料のアンモニアも船で運ぶ。これら一連の設備に約七十億円を投資することになっているが、逆に、投資すればするほど従業員を必要としなくなるとの問題がある。

減る一方の人口

来年の七月まで四百十二人を千葉・五井工場などに配転することになっているが、全体計画では、現在二千百人の工場を九百人から千人規模にする考えだ。半減である。これに対し労組側は企業の社会的責任として人員縮小に反対している。たとえば千人減ったとして、家族を含めて三・五人家族ならば三千五百人の市民が水俣からいなくなる。これと波及する人口減を見込めばそれ以上の人口流出となる。

一時は人口五万人を数えたものの現在は四万二百人。三万台に落ち込むだろう。チッソオンリーですべてが回転していた市民生活に狂いもこよう。市職員の定数も減員を余儀なくされよう。商店も売り上げが減る。都市計画も考え直さなければならない。チッソの住宅を中心とした中間地帯に空間が出来る。こんな危機意識が矢つぎ早に住民の不安をかりたてている。

新規事業は期待できるか

チッソ工場が先に出来たとは言え、工場縮小による人口減や市街地縮小は国土の有効利用、これまでの社会資本の投資など真剣に考えさせる問題を含んでいる。結局、新規事業を起こす以外にない。今回の配転問題でも労組側が主張しているのもそこにある。労組側も"新規事業を"というからには技術革新による合理化そのものを否定はしていないわけだ。

水俣での新規事業はどんなものが考えられるか。会社とチッソ新労が結んだ協定書によると、会社も労組も市に協力して工場誘致、地域産業の開発に努めることになっている。しかも向こう三年間にチッソは新規事業を起こす約束もある。女子従業員を対象としたものは人口流出の歯止めとはならないので、あまり歓迎されていない。だから潜用力がある工場が考えられている。

既存工場と関連あるものとしては来年からチッソ水俣工場で生産されるシリコンと新日本化学水俣工場のマグネシウムをくっつけて金属マグネシウム工場、その他チッソ新労は若松船の解体工場を考えている。最近若松鉄鋼船が各地の港に放置され、港内運航に支障をきたしている。また石北、水俣地方の豊富なミカンの冷凍、加工工場なども考えられているが、地域と結びついたものとして注目される。

しかしもう一つの新日窒労組との間では「六カ月の自宅待機」をめぐってすぶり続けている。同労組は六カ月の自宅待機はその後の何ら具体策がなければ首切り同然だと受け取っている。労組は運本的には一時的に人員を必要とする千葉・五井工場などへの配転は認めている。水俣へ帰って来ることを希望として―。だからこれも決め手になるのはなんとしても水俣での新規事業だ。

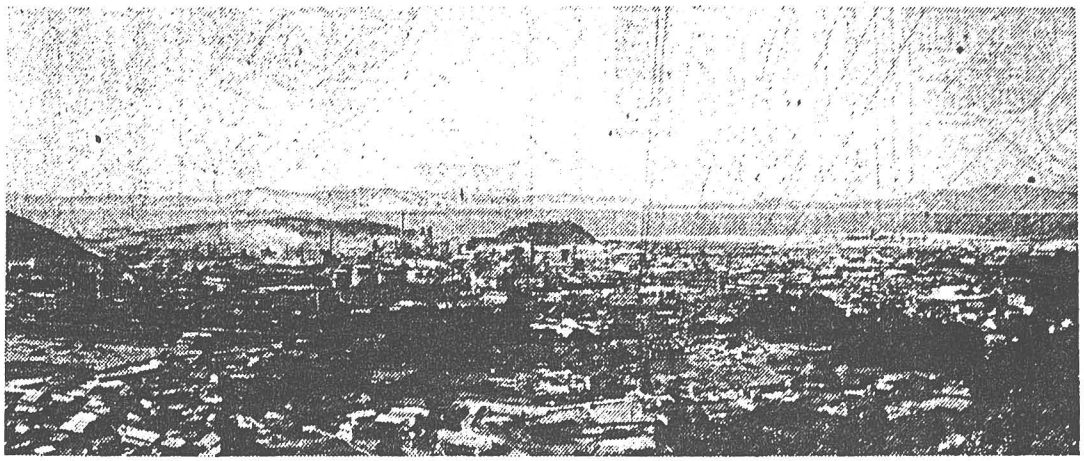
市政の課題

問題は市の将来の方向づけ。少なくとも現在工業、観光、農業が三本の柱となっている。これらと新規事業をどう関連づけるか。これらが成功すれば地域と密着した企業イメージも浮かんでこよう。もちろんプラン作りは行政上のもの。今後の市政担当者に重くのしかかる問題である。

同市の弱点はすべてがチッソ依存と指摘されている。橋本現市長はチッソ脱却の努力を重ねた。これがどう今後引き継がれてゆくか。

とうした中で次期市長選をめぐる動きがあわただしさを加えてきた。水俣病問題で上京中、橋本市長が病気で倒れて一年になる。過去通算四期市政を担当、戦後の水俣を造り上げた。全市公園化、健康福祉都市の看板をかかげ、生活環境の整備に力を入れた。しかし再起には時間がかかりそう。すでに自民、共産が来年の二月任期を前に市長選推薦者を決め、社会が態度決定を迫られている。一部には年内繰り上げ選挙を予想する向きもある。

これと年内に予想される水俣病補償処理委の結論が重なりそう。すでに処理委の結論は年金の方向で固まりつつあり、患者家庭の関心はその金額に集中されている。浜松派はやっと十五日第一回口頭弁論が相地裁で開かれる。しかしこれらはあくまで患者家庭とチッソとの当事者間のものであり、その後の患者の行政的措置をどうするかはまだこれからだ。



チッソを中心に広がる水俣市街地

チッソ依存脱皮へ

工場合理化・補償問題・市長選

新規事業開拓が決め手